



No. 146

ティークレイク

Tea Break

小鼓の話

会員 若林 擴

小鼓は張った革を打ち鳴らす紐締式膜鳴楽器の一つである。良質な桜材で作った長さ25センチから26センチで、中央が細く括れた砂時計型の胴の両端に、直径約20センチの鉄の輪に馬皮を丸く糸で縫いつけた膜を当て、これを「縦調べ」と呼ばれる麻紐で締め付け、さらに「横調べ」を巻き、「縦の締め緒」を左手の親指と人差し指ではさみ、緩くかけられた3本の「横調べ」には人差し指と中指を通し、親指と人差し指は「調べ緒」の張を変え、締めたり緩めたりして、膜面に加わる張力を加減して音に変化を与える。

打つのは膜の片面で、胴が裏から接触した丸い先端部近くを右手の薬指と中指の二本の指で打つと「タ」と高音が出て、薬指一本で打つと「チ」と小さな音が出る。大きな音「ポ」は膜面の中央の丸印を全部の指で打ち、小さな音「プ」は人差し指一本で打つ。

「イヤー」「ヨーイ」「ヨオ」は陽の掛け声、「ホオ」「ハ」は陰の掛け声である。

一般には、正座した奏者が左手で調べ緒を握って楽器を右肩に載せ、右手の指先で皮面を打って奏する。能の場合には床几に腰掛けて演奏する。小鼓は一鼓「いっこ」（雅楽で用いる鼓。長さ36センチの胴の両端に直径24センチの皮をあて、赤い調緒で締める。古くは唐楽に用いられたが、現在は鞆鼓で代用する）の系統を引く楽器で、能楽の四拍子「しびょうし」（能楽に用いられる笛“能管”、小鼓、大鼓“おおつづみ又は大皮と言う”、太鼓、の四種の楽器の総称で演奏者は囃子方といい、一つの楽器を一人が務める。それぞれ笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方という専門の役職として固定され、各役職には流派がある）の構成楽器として完成し、観世流、幸流、幸清流、大倉流の4流が生まれた。また歌舞伎の発達とともに

に田中、六郷、望月、福原、柏、堅田などの家元が生まれ、江戸時代後期以降各派はその技術を互いに競った。

日本書記の第9巻には武内宿禰が、「都豆美（つづみ）」を白に立てて歌ったという記録があり、正倉院の木簡には「投鼓」と呼ばれる道化が「鼓」を放り投げながら滑稽な仕草をしている絵が残る。楽器として明らかになるのは、百済の味摩之が伝えたと言われている「腰鼓」で、一鼓から四鼓まで4種類の鼓があったが、後に二鼓と四鼓がすたれ、現在では唐楽の特定の曲で一鼓（いっこ）、高麗楽全般に三鼓（さんのつづみ）が用いられている。

中国では膜鳴楽器を一般に「鼓」と呼ぶが、同じ膜鳴楽器に弦を張って弓で弾く日本の胡弓と似た擦絃楽器の一胡、二胡と漢字が異なるが字面が似ているのが面白い。二胡は二本の金属弦を上下に張り渡し、約180本の馬の尻尾を金属弦の間に挟み込み、弓を上下に素早く移動しながら左右に擦って音を出す。上弦は高音を、下弦は低音を担当する。

ちなみに胡弓は日本独特の擦絃楽器であり、小型の三味線に似た全身70センチ位の短い棹と小さい胴に、三本の絹糸の絃を、三角形の駒の頂点と両下端の三角形に張り、約180本の馬の尻尾を束ねた弓で、三角形に張り渡した各弦を擦って音を出すため、胴の角度を変えて演奏するのが面白い。同じ擦絃楽器であるバイオリンは略水平に張り渡した4本の弦の表面を弓と弦と直角方向に向かって擦って演奏する。

写真は稽古用の胴と、膜面がプラスチックから出来た合成の小鼓で、湿度や温度に関係なく音が出るのが利点だが、桜胴に馬の皮を張った鼓の音色とは雲泥の差がある。勿論鼓を打つ人の技量によって合成小鼓もなかなかの音を出す。



小鼓は胴の両端に麻の紐で膜を縦に締め付ける縦調べと、この縦の締め緒を横調べの麻紐で横に巻きつけ締め付ける事により、両端の膜を緊張させて音程を変えて音を出す。したがって、この横の調べ緒と縦の調べ緒を親指と人差し指で握り、緊張させて又開放させて音の高低を操る小鼓と、同じ様に調べ緒で胴に締め付けた膜を打つ締め太鼓は演奏中にチューニングが出来ない点で大きく異なる。

太鼓は演奏前に予め一定の音が出るように膜を紐で胴に締め付けるか釘で止め付ける。杵型太鼓、紐締め付け式太鼓、釘止め式樽型太鼓があり、日蓮宗の「うちわ太鼓」や歌舞伎の下座で用いる両面型の「柄太鼓」、囃子で用いる紐で上下の膜面を締め付ける「締め太鼓」、民族芸能で用いる各種サイズがある長胴の「祭り太鼓」、「大太鼓」、「やぐら太鼓」、「でんでん太鼓」、世界最大の雅楽用の「大太鼓」がある。

中国では膜鳴楽器を一般的に「鼓」と呼び「応鼓」「博鼓」等が知られている。

「大鼓（おおつづみ）」は「太鼓」と間違えないように「大皮」と書くこともある。

能楽の中では「小鼓」は肉に、「大鼓」は骨に例えられ、単なる伴奏楽器ではなく、囃子の演奏は能の一部であり、歌舞伎音楽の地方を務める三味線と、浄瑠璃を務める太夫と、笛、太鼓の囃子方も歌舞伎の一部である。

囃子方だけでも迫力のある演奏が成り立ち、これに長唄、清元節、常磐津節、義太夫節が付き、踊りが加わるとオーケストラの演奏が付いた壮大な日本のオペラと言う事になる。

みなさんも一度、篠笛または能管、小鼓、大鼓、締め太鼓を主とした演奏会をお聞きになると良い。能の「翁」を做った長唄「翁千歳三番叟」では、袴と袴を付け、床几に座った胴先、頭取、胴脇の3人が小鼓を打つ様は壮観である。

望月流家元が襲名する際に、小鼓一挺と合せるために作られた長唄「島の千歳」は、小鼓と唄、小鼓と三味線との掛け合いは見事に作られ、小鼓の魅力を十分に楽しめる。

縁あって芸大で篠笛、小鼓、締め太鼓の手ほどきを受けたので、これで大鼓（大皮）と能管を習えば、囃子方の四拍子“しびょうし”が完成する。

細棹の長唄、中棹の新内節、太棹津軽三味線の弾き分けが出来るようになり、生田流の胡弓も、特大の弓で六段を琴に合わせて弾けるようになった。後は死ぬまでに、銀座の山野楽器でチェン・ミンに手ほどきを受けた中国の二胡と生田流の琴と義太夫三味線と、囃子方の四拍子（篠笛及び能管、小鼓、大鼓、締め太鼓）を自在に操れるように成りたいものである。

